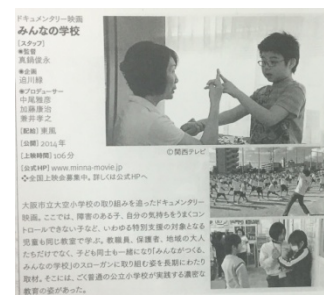


木村泰子さんインタビュー

『建築ジャーナル』2017年9月号特集「インクルージョン社会」に、大阪市立大空小学校元校長の木村泰子さんのインタビューが掲載。昨年12月、名古屋市立大学でドキュメンタリー映画「みんなの学校」上映会&講演会を開催し、参加者に感銘をあたえた。映画とともに、木村泰子『「みんなの学校」が教えてくれたこと』小学館を読み、大空小学校の原点やインクルーシブ教育のあり方を学んだ。本インタビューから、木村泰子元校長の鋭い指摘を抜粋して紹介する。



地域の学校は、地域住民が土です。土をしっかり耕せば、地域の学校はそこにどんと根を張れる。地域住民が地域の学校にきちんと根付いていれば、倒れることはありません。

学校のいいところを地域に発信しないといけないというのは過去の文化です。いいところは発信しなくてもいいんです。「学校がうまくいかない、困っているんだ」ということを地域住民が共有するから、地域の学校をつくる課題が見えてくる。その課題があればあるほど、みんなかかわらざるを得ないわけです。

小学校6年間で獲得してきた力は、絶対に子どもたちの体の底にちゃんと根付いていると思っています。中学校に行っているんなことがあっても、おかしいことはおかしいと言いながら、クリアしていっています。それは障害のある子どもとそうでない子どもという捉え方で6年間学んでないから。一緒にいるのが当たり前で育っていくと、そんな社会をつくっていくと思います。

支援が必要な子どもは毎日変わります。周りの子どもたちに関しても、一緒に生きていくわけだからお世話をする、されるという関係性でもない。テストの点数のような「目に見える力」も重要ですが、それ以上に大切なことを大空小の子どもたちは学んでいます。

子どもは子ども同士の関係性の中で学んでいきますから、先生が変に教えたり、この子は障害があるからとかかわったりすると、必ず周りから不平不満が出てきます。だから障害という言葉をただの一度も大空小では使っていません。

どんな障害でも障害を見るからその子が見れない。その子自身を見ていたら、障害はその子の特性・個性じゃないですか。直すものでもない。その子らしさが、結果としてダウン症だったり、自閉症だったりというだけ。その子が安心するかかわりを周りが考え、その子が安心する社会をつくる。その社会は当然周りの人間にとっても安心なものになります。

「障害」や「健常」という言葉を使っているうちは、真のインクルージョンは達成できないと思います。だから「障害のある人に手厚い社会」とか、「障害のある人と健常者がともに暮らす社会」というのは嘘だと思います。障害者も健常者もないのだから「ともに暮らす」なんていうのは、上から目線の偽善です。

幼稚園保育園の子どもが中学生になるまでの小学校6年間に、障害のある子はこっち、健常児はこっちと、学校が障害を理由に子ども同士の関係を分断していたら、この子どもたちは「障害のある子どもは自分たちより下だ」と勝手に思わされるんです。それは本当に大きな力を失っているということなんです。そこをどうするかですよ。

(2017年9月21日)